

その一つは、信友は「奈良人某」と言い、鈴鹿三七氏は「奈良附近の古寺」とする、この本の出所についてである。鈴鹿本を収納してあった、見るからに古色蒼然たる箱には、「今昔物語集」と直接墨書されており、蓋の裏に印が捺されていたように記憶する。もしそれが読み解けるならば、そこがこの本の出所であると速断することは避けなければならないにしても、鈴鹿本（奈良本）、今昔物語集の享受、流通について、問題を投げかけるであろう。鈴鹿本が、単に今昔物語集研究のみ

ならず、広く中世文化史の研究に大きな便益をもたらして行くことは疑いない。

鈴鹿本の特異な形態と謎の多い伝流、書写の特異性の意味するところは、今後の研究が必ず引き継いで行かねばならない大きな課題である（池上洵一「『日本文学研究大成 今昔物語集』解説」）

今や真の意味での公開——複製本の作製・公開の日が待たれるところである。

(03・12・01)

『西アフリカの歴史と民族』コレクション

アフリカ地域研究センター助教授

市 川 光 雄

数年前の昭和天皇の大葬の礼には、アフリカからも国家元首や大臣クラスの高官が多数列席した。天皇及び天皇制に対する興味もあったであろうが、おそらくそれ以上にアフリカ諸国の関心が、経済大国日本が果たすべき「国際的役割」にあったことはまちがいない。日本からの援助を期待して、このときにはたしてどのくらいの会見がおこなわれたのであろうか。その時の様子を伝えるテレビを見ていて啞然としたことを覚えている。それは中央アフリカのある国の代表と会見した国会議員の談話を伝えたものだが、この議員は、「アフリカにこんな国があることは知らなかった」と語っていた。アフリカの国名を知らなかったこと自体も問題ではあるが、それ以上に驚かされたのは、日本の代表として会見したこの議員がマス・メディアをまえにして、アフリカに関する無知を恥じる様子がまるでなかったことである。アフリカと日本との関係はまだこんな程度のものであったのかという思いであった。

植民地化以前からアフリカに深くコミットしていた西欧諸国とくらべて、日本におけるアフリカ理解や研究が遅れていたのはある意味ではやむを得ない。研究に必要な基本的な資料さえ、日本ではほとんど手に入らなかったからである。また、

日本がアフリカとの間に植民地支配というシビアな関係をもたなかったことを考えれば、これまで比較的関心が薄かったのも理由のないことではない。しかし現在のアフリカは51の独立国を有し、国連の全加盟国の3分の1近くを占める大勢力である。日本との経済的な関係も深まり、アフリカ諸国に対する政府開発援助は東南アジアに次いで2番目となっている。今後ますます日本とアフリカ諸国との関係が強化されてゆくことはまちがいないであろう。過去において日本とアフリカとの間に密接な関係が形成されなかったのは事実であるが、逆にいえばこれは、植民地支配によって歪められた西欧諸国の視点とは異なる見方を日本が示し得ることを意味する。そうした認識に立って、最近日本でもようやくアフリカに対する正当な関心が芽生えてきた。このような状況において、このたび本学中央図書館に、西アフリカの歴史と民族に関する文献資料のコレクションが設置されたことはきわめて意義のあることと考える。

本コレクションを所蔵していた故ダグラス・ジョーンズ博士は、イギリスにおけるアフリカ史研究の第一世代に属する学者である。リバプール大学で歴史学を専攻した後、1951年に、新設されたばかりのロンドン大学東洋・アフリカ学研究所の

西アフリカ史部門に赴任した。以後、1979年に病没するまで同部門においてアフリカ史の研究をつづけたが、その間、1954～1955年に黄金海岸（現在のガーナ）の大学において客員講師をつとめている。このときに北部ガーナ及びブルキナファソへの調査旅行をおこない、その成果を1962年に「Jakpa and the Foundations of Gonja」として発表している。これを除けば、ジョーンズ博士には長期に及ぶアフリカ滞在の経験やそれをもとにした研究はない。おそらく病気がちで健康に自信がなかったために、本国における文献研究の道を選んだのであろう。これ以降はもっぱらイギリス国内において植民地化以前の西アフリカ史の研究に専念するとともに、膨大な文献を渉猟して、それらのレビューの作業に携わった。同時に自身でも、初期の探検家、宣教師の旅行記や、植民地行政官の記録、さまざまな分野の専門書等、西アフリカに関する資料の収集を精力的におこなった。

本コレクションには、19世紀以前に出版された初版本や稀覯本など古色蒼然とした装丁のものが数多く含まれており、ジョーンズ博士が単なる資料としての価値以上のものを求めてこれらの書物を収集したことが窺われる。本コレクションはこの愛書家の碩学が生涯をかけて収集した精髓といってよい。かつては、「その人の蔵書をみれば学者としての質がわかる」といわれたが、図書館の整備された今日ではこの言葉はほとんど意味をもたなくなってしまった。現在ではむしろ、研究者個人の蔵書よりは、研究者が利用する図書館等にどれだけの文献が整っているかということの方が重要である。個人の蔵書にもとづいて研究がおこなわれた最後の時代を生きた碩学の蔵書が、こうして大学の図書館に収められることになったのも研究体制の変化を物語るものであろう。

本コレクションがカバーする西アフリカは文化的にも歴史的にも極めて重要な地域である。紀元前数千年には、この地域のサヴァンナ帯でヒエ類等の雑穀栽培を主とした独自の農耕が発達していた。今日、世界各地に普及しているゴマ、オクラ等はいずれも西アフリカ原産の栽培作物である。またこうした古い伝統を背景に、ナイジェリア・

カメルーン地域ではいわゆるバントゥー系の農耕社会が成立したが、彼らがやがて中央アフリカ森林地帯の外縁を経由して東部及び南部アフリカ方面に拡散し、今日のケニア、タンザニア、ウガンダ、ザンビア、マラウイ、ジンバブウェ、南アフリカなどにまで分布を広げたのである。西アフリカ地域はこのような広い分布と古い文化的伝統を有するバントゥー社会の発祥の地でもある。さらに西アフリカでは、サハラの南北を結ぶ長距離交易が古くから発達しており、西欧社会との接触以前にニジェール河畔のトンブクトゥなどに交易の拠点となる都市が形成されていた。

このように古い歴史と独自の文化を持ちながらも、西アフリカの沿岸地域は、大航海時代以降いちちはやく象牙、金、そして奴隷などの交易を通じて世界経済に組み込まれていった。さらに19世紀末の植民地化以降には、植民地政府によるカカオやコーヒー等の換金作物の導入や森林伐採などによって急速に森林が破壊され、土地が疲弊してゆくことになった。西アフリカはこのように、アフリカにおけるさまざまな問題点が集約されている地域でもある。

本コレクションは合計1129点、1548冊から成っており、西アフリカに関する最近のコレクションとしては最大かつ最良のものといえてよい。その内容構成は、西アフリカ全般に関するもの280点、西アフリカ経済史に関するもの51点のほか、国別・地方別にナイジェリア270点、ガーナ及びトーゴ170点、セネガル・ガンビア・モーリタニア131点、カメルーン44点、シエラレオネ39点、ダホメ30点、リベリア16点、ギニア17点、コートジボワール11点、となっている。英語圏のみならず、西アフリカの3分の2を占めるフランス語圏の国々に関する文献が多いことにも注目する必要がある。

植民地化以前のアフリカ史の研究においては、アフリカ人による口頭伝承のほかに、初期の探検家や宣教師等の記録が基礎資料となるが、本コレクションにはそうした資料も多数含まれている。1900年以前に出版された25篇の代表的な旅行記のほとんどがこのコレクションに収められている。しかもその中には、アフリカ大陸の西岸から出発

して初めてニジェール川の内陸部に到達したマンガ・パークの探検の記録「Travels in the Interior Districts of Africa」の第二版（1799年出版）や、アラブ人に変装してトンプクツに潜入した後、サハラ砂漠を越えて地中海まで帰還したルネ・カイエによる英語版報告書「Travels through Central Africa to Timbuctoo」（1830年初版）、リビアのトリポリからサハラを越え、トンプクツを経由してナイジェリアのカノまで、5年の年月をかけて到達したヘンリー・バースの報告書「Travels and Discoveries in North and Central Africa」（1857、58年初版）などの学術的にも貴重な稀観本が少ない。

1885年のベルリン会議において、アフリカは西欧列強の植民地に分割された。これ以降アフリカでは政治、経済、社会の面において急速に植民地化が進行するが、本コレクションにはこのきわめて重要な時期に関しても植民地行政官の記録等の貴重な資料が数多く含まれている。

1960年代初めのアフリカ諸国の独立以降の文献ではナイジェリアとガーナに関するものが充実している。また、1967年～1970年のナイジェリアの内乱に関する文献や、北部ナイジェリアの首長国の歴史とその現代政治に対する影響など、現代アフリカを理解するための歴史的背景に関する文献も見逃すことができない。

このようにみてくると本コレクションは、植民地化以前の西アフリカ社会と、その植民地政策及び独立以降の変貌を追跡するための不可欠な資料であることがわかる。実際、本コレクションの特徴は、多くの稀観書が存在もさることながら、これだけで西アフリカにおける歴史の流れを追うことができるような広範囲の基礎資料や専門書が網羅されていることにある。

